

「教育臨床総合研究紀要 4 2005研究」

平成16年度の基礎体験領域の取り組みについて

A Report of Approaches on “Basic Experience Area” in 2004

山中 慎 嗣* 森 本 直 人*
Shinji YAMANAKA Naoto MORIMOTO

取り組みの背景

今日、少子高齢化、価値観の多様化、国際化、高度情報化等の様々な変化に併せて、学校の教育の普遍的な部分と変化に合わせた柔軟な対応が求められている。また、子ども達に直接関わる安全、いじめ、不登校、あるいは、学力の低下といった問題が大きな社会問題となっており、学校のあり方そのものが問われ、その組織の一員である教育のプロとしての教員の資質が改めて問われている。少し言い方が悪いが、学校へ登校して、静かに椅子に座り、教師の言うことを真剣に聞ける子どもを相手にしてなら、いい授業ができるとか力がつけられるなどと言っているようでは、現場で教師は動まらない状況なのである。つまり、教科教育やカウンセリングなどの専門性を高めるだけでは対応しきれない状況にあり、求められる教員の資質は指導力、人間関係能力、人間性など多くの要素を含んでいる。そうした資質を様々な場面において総合して発揮する指導者をプロとしての教師と呼ぶのである。

しかし、大学の教員養成段階におけるカリキュラムだけでは、そうした専門家として必要な資質や能力、パフォーマンスを育成することは不可能である。

例えば、教育実習においても、実習生の中には子どもとどう関わればよいのか戸惑ったり、声かけもできない者もいると言う。集中した短い実習期間の中で、課せられた課題をこなすのが精一杯という学生もいることであろう。カリキュラムに追いまわされる面も少なからずある。そんな中で子どもたちを前に立ちすくんでしまう学生の姿があるとしたら悲劇的である。子どもとの対面が本人の将来の教職への道に暗い陰を落とす結果となり、意欲の喪失へと導く結果となってしまう。また、指導する立場としても、学生の適性や実習の評価云々の問題だけでなく、従来のカリキュラムにとらわれない教員養成に向けた手だてを講じる必要がある。

教員養成学部として再出発した本学部においては、今後、学内で学ぶ専門的な理論や実習に併せて基盤的なあるいは横断的というべき臨床体験が必要であり、学生が関心や意欲をもって本人の能力を総合して子どもと関わる体験が継続的に必要なのである。このような場は、大学内での講義・演習や実習だけではとても期待できるものではなく、実体験、いわゆる場数を踏むことによって、獲得することが重要なことであろうと考える。実体験の場においては、その場において俊敏に対応のあり方を決定し、アクションを起こすことが重要であり、失敗を恐れ

* 附属教育支援センター基礎体験領域担当

ないで挑戦し、また、それが許される場での積み重ねが必要なのである。

しかも、できれば教員養成課程に入学した当初から、学生が興味・関心のある体験に積極的に関わっていくことができるように保障することが大切である。様々な場を踏んでいくことで子ども達への関わりが自然とできるようになったり、学校を概観できたり、地域社会の人々と目的や願いを共有した取り組みができるようになり、結果として、コミュニケーション能力や教職への意欲の高まりが期待できると考える。

よって、体験の範囲は、特別支援教育を含めた学校教育にとどまらず、学童保育や週末の青少年教育活動など地域における教育活動にも積極的にに関わり、多くの地域住民や育成リーダーの方々と活動をともにすることへ広がる。コミュニケーションを大切にしながら、多様な価値観に触れ、地域の大人の願いや実践を知ったり、地域と学校の関わりを体験的に理解することを通して、保護者や地域に積極的に関わっていける教師の育成につながるのではないかと考える。

こうしたことを踏まえ、本学部においては平成16年度より教育実習を含めた学内外の体験を1,000時間積み上げることを卒業要件として体験学修をスタートさせた。そして、それを指導、サポートする教育支援センターを開設して専任、兼任の教員を置き、検討・検証することとしたのである。

以下、スタート年度の取り組みの概要や成果及び課題を述べることとする。

取り組みの内容

1 目 的

学校における支援活動や地域社会で展開されている子育て事業や子育て支援事業への参画及び活動支援、様々な指導技術や支援法を学ぶ講座への参加など、多様な体験を豊かにし、人間関係能力を培いながら子どもや子どもを取り巻く社会に対する理解を深め、教職をめざす者としての自覚と意欲を高める。

(1) 基礎体験領域にかかる体験学修のねらい

子ども理解力を高める

子どもとふれあう体験を通して子どもを好きになり、子どもの気持ちや感情を理解し、積極的に関わろうとすること

子ども一人ひとりに目配りができ、関心を持つこと

障害児や心に悩みのある子どもたちの活動に関わり、障害児や特別支援教育について理解を深めること

指導力を高める

活動のねらいを理解し、組織やグループの一員としての役割が果たせること

また、必要に応じて個人や集団に指示や助言ができること

指導者養成講座や研修を通じて、指導法を習得すること

ボランティア養成講座等に参加して、障害児の活動や生活支援の仕方について

理解を深めること

人間関係能力を高める

社会教育活動に関わり、地域教育について関心を持つこと

様々な教育機関や団体の人々と積極的に関わること

一社会人、地域人として社会参加活動や地域貢献活動を行い、地域の住民との交流を深め、コミュニティづくりや地域の若者としての一役を担うこと

企画力を高める

事業の企画段階から主体的に関わり、事業を企画（ヒト、モノ、金など）するための要件について理解を深めること

2 3種類の体験

卒業要件としての時間の積み上げを1年生からスタートさせる取り組みを組織的に実施しているのは、本学部が全国で初めてのものとする。とはいえ、その取り組みは暗中模索であり、大なり小なり様々な問題が生じてきているのであるが、取り組みを継続する中で検討・整理していき整備されてくるものと思っている。

本学部でスタートさせた基礎体験領域については、3つの視点で体験を分類している。

その一つは、子どもと直接関わる体験である。

学校内外を問わず子ども達と直接触れ合う体験をこの中に含めている。教師は、子どもへの教育活動を展開する専門家であることから、その養成を考えればこの体験は、説明を要さないであろう。

ただ、ここで重要なのは、これまでも述べたが学校教育への関わりだけでなく、地域教育に関わることも重要であるということである。学校と家庭を往来する毎日を送る教師に、地域との関わりが薄い、なかなか地域が見えていない、協力してもらえない、自分の都合で活用することしか考えてないなどの地域や保護者からの声があり、地域との連携力は今後の教師にさらに期待される資質である。一方、学校においても生徒指導上の問題や子どもの安全確保、地域の教育力の学校教育への導入などを考えれば、地域との連携力は必要不可欠な資質・能力である。何よりも学校は、地域の中の学校であり、地域の財産でもある。

二つめは、知識や技術について学ぶ体験である。

今や、現場の特に若い年代の教師自身が、自然体験、社会体験、ボランティア体験などをはじめとする体験が不足していることが指摘されている中で、学生においても然りである。例えば、子どもたちを前にして遊びの紹介をいくつできるであろうか。主導権を子どもに託しながらも、自分の出番があるとしたらそれはどんなときであろうか。そうした手法や知識をここで体験的に学んで欲しいと考えるのである。

具体的には、青少年教育施設等が実施している「青少年指導者養成講座」「ボランティア養成講座」「レクリエーションの集い」など、子どもたちを前にしたときの技術的なレベルを中心とした手法を学ぶ体験。また、障害児をサポートすることを目的とした「ボランティア養成講座」や今年度は、中四国地区の「奨学生の集い」に参加して、テーマ別のトークや研修、交流したものもこれに含めて認定した。

三つめは、一地域人、社会人として地域活動やボランティア活動に関わる体験である。

教師も学生も一地域人である。地域の一員としての役割も社会の構成員として果たしていかなくてはならない。本大学の周辺はのどかな田園地帯が広がっていたが、今や開発が進み道路整備がなされ、賃貸住宅の建設、サービス業をはじめとする商店が立ち並んでいる。本大学がこうした地域の活性化に貢献していることは、自他ともに認めるところであるが、それゆえ、一方では自転車の放置、大学周辺のゴミの散乱、夜間の騒音など地域の住民や自治会の悩みの種を創出していることも事実である。

学内では、注意を喚起する掲示や通知がなされているが、なかなか改善されないのが現実ではなかろうか。例えば、地区内の公民館や自治会が主催する環境美化活動や地域の住民相互の交流活動に学生が参加し、社会人としての規範意識の高揚を図り、住民の一人としての地域参加の機会を与えることが、教師であり一社会人として共生社会を築く一員として今後生きる体験になると考えたからである。

よって、この中には場合によっては、本来当然するべきことであり、体験として改めて取り上げるべきではないと指摘されかねない内容も含んでいるのである。直接教師という職に結びつかないが、人間関係能力を高める機会として、あるいは社会人への準備としてやったことのないことをやる機会を提供すると考えている。

基礎体験学修の3種類の体験

- (1) 直接子どもに関わる体験
- (2) 知識や技術について体験的に学修するもの
 - ・指導者養成講座・ボランティア養成講座的なもの
- (3) 一地域人、社会人として地域活動やボランティア活動に関わる体験

3 教育支援センターのめざす取り組み

体験学修の計画・管理及び学生への指導を行う。

自治体、教育関係団体、NPO等との協力関係を構築し、ねらいに即した指導体制を構築する。

体験学修のねらいに即した学修のあり方を検討し、整理する。

教育実習や臨床・カウンセリング体験領域との関連性について整理し、体験的なカリキュラムを教員養成カリキュラムに導入した新たなカリキュラムの構築を検討する。

卒業して学校現場に出た学生にとって、体験学修がどう生きて働く実践となったかを評価し、カリキュラムの改善に生かす。(平成20年度以降)

具体的な取り組みの手順と内容

1 教育支援センターの具体的な取り組み内容について

学生の体験をサポートする教育支援センターでは、基礎体験部門の専門部会を組織するとと

もに、具体的な取り組みについては2名の専任教員が対応する体制で臨んだ。

具体的な内容について、先の「 - 3 教育支援センターのめざす取り組み」に準じて述べることとする。

- 3 - 「体験学修の計画・管理及び学生への指導」について

学生に体験の意義、積極的参加、振り返り、情報交換などについて年間を通じた指導を行う。

- ・基礎体験オリエンテーションの実施 ・中間での状況報告と参加の呼びかけ
- ・基礎体験交流会の実施

学部内に学修先についての情報提供を行うとともに、学生とのコーディネートを行う。

長期間にわたる実習については、定期的に状況を把握するとともに、学生への指導や学修の状況把握に努める。

- ・体験学修先への訪問と状況聴取

学生の1,000時間の体験の時間認定を行うとともに、記録を管理する。

1,000時間の体験学修を要件としていることから、時間の認定を行い、管理・指導する。

- ・中間での時間の積み上げや体験の必要性についての指導（再掲）

入門期セミナーや各年度のまとめを企画・実施する。

学生の体験学修での成果を交換したり、情報を共有する機会を設けて「ふりかえり」と意欲的な参加を促す機会となるような場が設定する。

- ・基礎体験オリエンテーションの実施 ・中間での状況報告と参加の呼びかけ
- ・基礎体験交流会の実施（再掲）

- 3 - 「自治体、教育関係団体、NPO等との協力関係と指導体制の構築」について

各自治体（県教育委員会、市町村教育委員会など）、社会教育関係団体等に対して、情報提供と協力要請を行う。

本学修のねらいに即した活動をプログラム化することが必要であるが、学部内での実施はとても困難であり、地方自治体や青少年育成団体等への協力要請をする。

また、指導については、大学の教員が直接行うことが難しいこともあり、その場合は活動の主催者（実施主体）に委ねることとなる。よって、学修のねらいや具体的な手順等を十分説明する機会を設け、連携を密にしながら実施していく。

関係機関に対しては、島根大学教育学部が実施する「1,000時間体験学修」について説明会等を開催し、双方にメリットのある取り組みとなるよう協力要請を行う。

学部HP、教育支援センターHP等を活用して、情報提供の充実に努める。

- ・教育支援センターHPの開設

単にアルバイトやボランティアではなく、ねらいに即した指導を期待する旨、担当者等との打ち合わせを行う。

【説明及び協力要請に出かけた主な会議等】

- ・ 島根県市町村学校教育・社会教育主管課長会議
- ・ 島根県東部地区社会教育担当者会議
- ・ 松江市公民館長連絡協議会
- ・ 島根県地域教育コーディネーター研修
- ・ 鳥取県西部地区社会教育担当者会議
- ・ 松江市教育委員会、東出雲町教育委員会、松江市内公民館、 ほか

- 3 - 「ねらいに即した学修のあり方検討と整理」及び「教育実習や臨床カウンセリング体験領域との関連と新たな教員養成カリキュラムの検討」について

年度終了後、学生の自己評価、学修受け入れ先の意見等を踏まえ、一年のまとめを行うとともに、今後の学修のあり方について検討する。

- ・基礎体験交流会の実施（再掲）

- ・今年度については、受け入れ先への意見聴取は実施しなかった。

については、学生の体験の積み上げと成果や課題を取り上げる中でこれから検討していく大きな課題である。

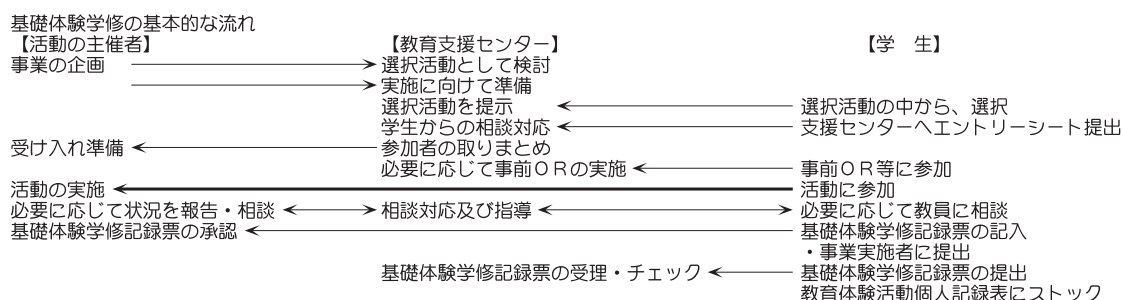
- 3 - 「卒業生による体験学修の評価をカリキュラムの改善に生かす」について

1,000時間体験を修了した学生が、体験したことがどう学校現場で生かされたかを追跡調査等の実施により、基礎資料として今後の取り組みのあり方を検討する。

ただ、これについてはスタートした現1年生が卒業し、学校教育現場へ就職した後の取り組みとなる。

2 基礎体験学修の手順

基礎体験学修は、以下のような手順を進めることとした。



「教育体験学修調書」の提出

学生それぞれの興味・関心、特性、ニーズ等を記入し、センターに提出する。

参加の呼びかけ

連携先の機関や団体との調整により、学生の体験の場を具体的に示した体験概要を掲示し、参加の呼びかけ（募集）を行う。

今後は、ホームページを活用した情報の提供についても検討実施することとしている。

参加する活動の選択

掲示の中から参加する活動を選択し、センターに参加について届け出る。

活動への参加：実際に活動に参加する。

「基礎体験活動記録票」（末尾 資料1）の提出

参加した体験の具体的な内容、参加した感想、連携先担当者のサイン等を記載する基礎体験活動記録票を学生に配布し、終了後に提出することとしている。

「個人記録カード」への記録

センターは、活動ごとに「基礎体験活動記録票」に基づき活動時間を認定する。

今後、学生は、認定された活動時間をセンター設置のパソコンにより各自のアカウントを開設して、随時、準備された「教育体験学修個人記録表」に記録し、自己管理していくこととしている。

体験時間の通知と照合

センターは学期末の成績交付時にあわせて、各人にそれまでに認定された体験時間を通知する。学生は、自分の「教育体験学修個人記録表」に記載した活動時間と通知された活動時間とを照合し、確認することとなる。

* なお、活動への参加は、センターを通して、上記の流れに沿って行うことを原則とするが、この他に、学生が長期休業中などに直接関係機関等に連絡し、当該機関等が実施する活動に参加することも認めることがある。

今年度の取り組みの成果と課題

1 今年度連携した事業について

今年度は、スタート年度ということもあって、学生と連携先の事業の需要と供給の関係がどの程度のものなのか検討がつかなかったが、PRやこれまでの教員の個人的な連携事業を一括して、学生に掲示し、参加があったのは以下のような事業であった。

【平成16年度の主な基礎体験の内容】

直接子ども理解を深める体験

1 特別支援教育体験

松江清心養護学校学童保育クラブ	松江養護学校学童保育クラブ
あじさいの会自閉症療育キャンプ	不登校児童のための自然体験活動
適応指導教室活動	ふれあいの集い
障害児のためのサマースクール	整肢学園夏祭り
	心のかけ橋支援ツアー ほか

2 学校教育活動支援体験

松江放課後チューター	附属小学校における学習支援
附属小学校造形クラブ活動	附属小学校水泳指導
ちどりクラブ (附属小) バレーボール指導	
松江三中サンレイリーダー研修	ほか

4 青少年社会教育施設体験

障害のある児童・生徒支援事業	少年自然の家宿泊研修
若者の健全育成推進事業	大山わくわく探検隊事業
高校生ボランティアフォーラム	スマイルキャンプ ほか

5 市町村や民間団体の子ども事業体験

出雲市島大生のチャレンジ教室	出雲市ウィークエンドスクール
美保関町いきいきサマースクール	東出雲町ジュニアリーダー研修
東出雲町保育体験	城北地区子ども教室推進事業
朝日地区祭り	城西地区放課後児童クラブ
横田町吾妻山のびのびキャンプ	海士町アドベンチャーキャンプ
八束町子ども週末体験事業	八雲国際演劇祭ボランティア ほか

知識や技術について体験的に学修するもの

1 国立・県立社会教育施設が実施する指導者養成講座など

野外活動ボランティア研修会	野遊びの達人塾
ファームステイ三瓶	施設ボランティア養成講座
青少年活動支援者養成講座	ほか

2 その他

知的障害児サポーター養成講座

地域の一員として行う共生体験

古志原公民館福祉まつり	まちなかクリーンツーリズム
白濁ウォークラリーと町歩きマップ制作	

【平成16年度月別活動数及び参加学生数】

月	活動数	参加人数
5	1	85
6	2	28
7、8	42	126
9	8	61
10	7	18
11	7	23
12	6	17
1	9	94
2	2	7
3	8	63
合計	92	522

これらの体験は、大学の都合によって実施できるものではなく、行政や社会教育施設や公民館、学校などの教育機関、NPOや民間団体などと連携して協力を得てはじめて実現できるものである。そして、内容的、時間的に凝縮された単位取得のための実習ではなく、学生の教員への意欲を高めるため、そして、社会性を身につけるための具体的な体験の場である。このことへの理解を得て、連携先へは、事業のねらい達成のために学生をしっかりと活用してもらうこと、そしてこれに対し、教員養成の一環として学生への指導・助言を頂くことをお願いしている。

平成16年度は、一部、年度末の事業が整理できていない所があるが、年間約90事業に学生が参加しており、一人が約3事業に参加した計算になる。

ただ、3事業と言っても一日の単発事業で2時間程度の事業もあれば、放課後学習チューターのように半年間などの長期にわたる何十時間にも及ぶ体験も1事業であるため事業数を問題にするのは意味がないが、今後、1年生から4年生までが対象となることや学生それぞれの興味・関心やニーズを考えれば、さらなる開拓は不可欠であろう。

2 学生の体験の積み上げ時間

本学部の「教育体験1,000時間」は、大きく3つの領域から構成されている。一つは、「臨床カウンセリング体験領域」、そして「学校教育体験領域」最後に「基礎体験領域」である。この3つの体験領域を1,000時間積み上げることが卒業要件となっている。そのうち、基礎体験領域は410時間を積み上げることとしている。

【各体験領域と積み上げ時間】

体験領域	積算時間
入門期セミナー	60h
臨床・カウンセリング体験	150h
学校教育体験	380h
基礎体験	410h
合計	1,000h

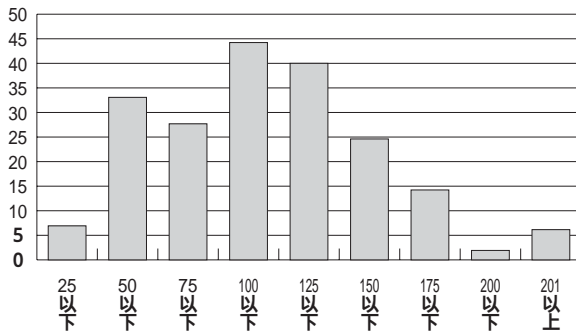
基礎体験領域の410時間は、さらに教育支援センターが学部の中学生を対象に行う体験（約310時間）と各講座毎に実施する「講座別体験」（約100時間）に分けて行うこととしている。

よって基礎体験領域については、教育支援センターが担当する310時間を4年間かけて学生が積み上げていくことになり、単純に分割すれば年間約70～80時間の積み上げが一つの目安となる。

今年度の1年生の基礎体験領域の時間の積み上げ状況は、以下のとおりである。

【基礎体験の時間積み上げ状況】

(H17.2末現在)



参加する機会を伺う努力をするよう指導していく必要があり、個別に対応していかなければならないと考えている。

大部分の学生は、時間的には順調に積み上げているものの積極的に体験学修に参加する学生とそうでない学生の二極化が見られないこともない。というのも、一つには特に 類の音楽及び健康・スポーツの学生にとっては週末の基礎体験の学修に出かける好機には、講座ごとの活動やスポーツ部活動等により参加が困難な状況があり、時間の積み上げを着々とする他の講座の学生と差が生じてきている。

このことは、右に示した「専攻別時間認定の平均」からもわかる。

また、もう一つには、子どもたちと触れあう

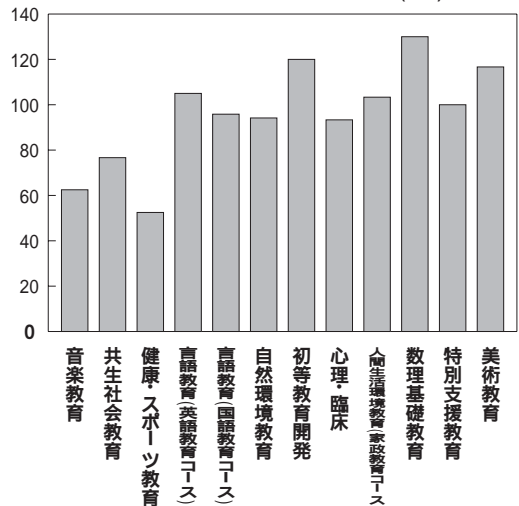
体験をした学生は、身体で子どもについて感じ、次の体験での己のあり方に課題意識を持っている。また、ひいては教職への夢をさらに膨らませ、意欲を燃やす結果に結びついている様子が基礎体験学修記録票からも伺える。体験を通じて自分の存在感や有用感、達成感を味わい、と同時に反省と課題が次の活動への意欲となり、よい循環を果たしていることで、結果として多くの時間の積み上げが可能となっているといえる。

なお、特に50時間に満たない学生、なかでも 類の学生については、本格的には来年度から始めることとなってしまったが、「講座別体験」において講座の特色を生かした体験により時間の積み上げが可能となる。さらに教育体験活動運営委員会において、「講座別体験」に配分した100時間を限定的に捉えるのではなく、ある程度幅を持たせたカウントを可能とすることが協議決定されたことから、時間に追われ基礎体験の積み上げが厳しい状況にある学生も講座に関わる体験の積み上げにより時間数は確保が可能となる。基礎体験学修への参加が難しいことによって、参加意欲が減退したり、体験の必要性自体に疑義を感じている学生が次年度より積極的に地域や教育現場に出かけていくよう、情報提供と個別相談に力を注いでいかなければならない。

これを見ると、約6割の学生が目安となる75時間以上を積み上げていることがわかる。2月末までに学生の体験記録票の提出を求め、一応の取りまとめを試みたが、それ以後もかなりの記録票の提出があり、積み上げ時間はさらに上乘せがあるものと予想される。

ただ、2割の学生が50時間にも満たない状況を放置するわけにはいかない。学生の意識や時間的な状況等を聞きながら、

【専攻別時間認定の平均 (h)】



3 基礎体験学修の成果と問題点

(1) 各活動毎の体験記録票から

各体験に参加した後に教育支援センターに提出する「基礎体験活動記録票」に書かれた学生の感想から、学生から見た基礎体験の成果を考えてみたい。

【基礎体験活動記録票から（抜粋）】

慣れてきたと思ったら、また対応が難しいこともあり、行くとき行くときで学ぶことが多かったと思う。小学生と中学生とでは、集中力や勉強に対する考え方が違うため、同じ場所で行う難しさもかなり感じた。

小学生は、自分勝手に動き回るので集めるのにも苦労するし、ケンカを始めたりするとかかなりあたふたしてしまった。全員をうまく動かすのは非常に難しく、一人で授業を仕切っていくことの難しさを実感した。

プレーパークの活動を通して、廃材などを使って、遊び道具を作ったり、机を作ったりと子どもたちの能力に驚かされた。プレリーダーという立場で子どもをサポートするはずが、いつのまにか遊びに便乗している方が多かった。遊びのきっかけを作るというのは、本当に難しいことだと実感した。

今まではボランティアとして活動を支援する側だったが、今回は体験をする側に戻ることで指導者の指導力の必要性を改めて感じた。天候が悪い時にはその時なりの活動をするという臨機応変に内容を準備する職員の方に驚きながらも感心した。

保護者が付いてこられていたので、子どもとずっと接することはなかったが、もっと自分から積極的に子どもと触れ合ったり、観察する行動力も持たないといけないと思った。今後はもっと子どもと寝食を共にしたりして、より交流を深められる活動にも参加したい。

今回は保育者（こどもの世話だけでなく）をさせて頂き、この仕事の大変さを改めて実感することができた。しかし、この体験により子どもと関わる仕事がしたいという気持ちを強くした。

子どものみならず、保護者の方とも関わることができ、とても貴重な体験をさせてもらった。親子の様子を見ることで子どもとの接し方が少しわかったような気がした。



【保育体験の様子】

何百という記録票の学生の声をうまく紹介することはできないが、ほぼ全ての学生からは、多くの子ども達と関わり、「子どもって、～なこと言うんだな」「子どもっておもしろいな」「子どもに教えるって難しいな」「子どもと一緒にいると楽しいな」「次は、もっと声をかけたいな」など、これまでに経験したことのない感触あるいは、感想を持ちもっと深く関わってい

こうとする意欲が感じられる。

また、初めて指導者の立場に立った経験から、子どもに教えることの難しさや難しい中でも創意工夫して挑戦する楽しさを体験できた学生も多いことがわかる。

そして、多くの学生が共通して書いていたのは、子ども達やボランティアなどの仲間といかに積極的に関わっていくかが大きな課題であるということである。まさにこのことが、基礎体験領域のねらいとしている「コミュニケーション能力」「人間関係能力」の向上をめざすことと学生の課題が合致する部分であり、これからの学校教育現場の教員に必要な資質と指摘されているところでもある。

基礎体験領域での体験では、学生が受け身ではなく、子どもをはじめ他者に自ら関わる中で、内省し挑戦することを長期的、継続的に繰り返すなかで鍛えられていくのであり、その成果は大きいであろうと期待できる。学校教育体験領域と螺旋的に絡み合いながら、まずは、学校教育実習においてその成果が発揮されるのではないかと期待されるのである。

(2) 年間の振り返りアンケートから

年度末2月に1年生全員を集めて「基礎体験学修交流会」と称して、これまで各自が積み上げてきた体験について、情報交換の場をもち、次年度の体験選択の参考にするとともに、体験学修への参加意欲の高揚を図ることをねらった活動を行った。

同時に「年間の体験の振り返りアンケート」を実施したので、この中から学生の基礎体験学修を「有意義と感じた理由」について紹介する。

【基礎体験学修で最も有意義と感じた活動とその理由】（理由のみ抜粋）

教育学部のみんなと交流してこれからの学生生活に明るい希望が見えた。

自然について学び、自然と触れあいながらゲームを通してコミュニケーションをとる方法を学ぶことができた。

子ども達が初めて体験するスポーツや自然の楽しさに触れている姿を見て、子どもが好きなことを改めて実感させられ、教員への意欲がますます湧いてきた。

最近始まったばかりなのでまだ慣れないが、自分達で授業が作られ、子ども達との交流も図られ、わからないことだらけだが、とても勉強になった。

幼稚園の記念歌作成とその歌の指導を通じて、園児達との交流と自分の作品の一般的な評価が聞けた。

実際に子どもと接することで、コミュニケーションの大切さや言葉かけの大切さを知り、これからの体験活動や教育実習などで生かせると思った。

子ども達と関わる中で指導者というものがどんなものか、少しでも学べた。

自分達で企画し、実践することの大変さがわかった。

実際に子どもと関わることは、そんなないことだから、その場をもらい接し方が少しでもわかった。

福祉まつりに参加して、いろいろな年代の人と触れあえたこととそこで新たな知識を得られた。

子どもばかりでなく、大人の方とも接することができた。親子や兄弟という関係を考えることができた。

自分自身であることがわからず、周りの大人の指示を伺っていた時、自分の力のなさを実感した。自分で考えて実践していく術を学ぶ必要性を強く感じた。

障害児に対する理解が深まった。子どもの成長を感じることができた。

一人ひとりの子どものことを理解していなければならない、ということの大切さを学べた。

人に教えるという行為の難しさ、自分と違う世代と接する難しさを実際に体験したことで自分の力のなさを実感することができた。

興味を持ったことについて、子どもが真剣に努力する姿を目の前で見ることができて、子どもの熱意や学習能力の高さを目にすることができた。

障害児と長時間接することができた。自分の未熟さを再確認することができたし、何よりも接することが楽しいと思えた。

介助などについて教えてもらったり、実際に知的障害児と触れ合うことができた。

地域の人の活動を知ることができた。

先生や経験豊かなボランティアの方と話をしたり、子ども達のことを一緒に考えたりして、自分は何をすべきなのか考えることができた。

わかりやすい教え方を考えようと自分自身が思えるようになった。



【基礎体験交流会でお互いの体験を情報交換する学生たち】

また、この交流会によって、次年度に向けた活動意欲の高揚とやってみたい活動内容の見当がつけばと考えたが、このことについて学生の交流会の感想を一部紹介する。

この活動を通して、自分が体験した活動で学んだことを思い出すことができたし、他の人の意見を聞いて共感したり、新たな考えを知るよい機会にもなった。でも、やはり自分の活動時間の少なさを実感することにもなったので、もっと積極的に活動していかなければならないと思った。

子ども達との関わり方で今、不安に感じていること、状況に応じた働きかけ方などに疑問を感じていることなど、正直な気持ちをお互いに言い合えたのがよかった。

みんなの体験を聞いて、今後の参加を促すことができたと思う。積極的に参加しようと思った。毎年ある活動は、その前の年の参加者の感想や意見などを添えて紹介したりすればいいと思った。

自分自身の体験だけではなく、友達の体験を知ることにより、新たに体験してみたい活動も出てきた。さらに他の人の体験実績を聞くことにより、私ももっと頑張らなければという気持ちにもさせてくれた。

みんな教師を目指すというだけあり、子どもとの触れあいや現場の職員さんや先輩からのアドバイスを通してたくさんのことを吸収しているなど感じた。

みんな1,000時間体験活動を通して色々なことを考え、学んでいる。だから、1,000時間体験活動は、私たちにとって有意義なものであると思うし、これからのことにとても役立っていくだろうと思う。

同じ体験をしながら違ったことを感じていたり、子ども達との触れあいの中で「自分がどう関わるべきか？」という問題にきちんと向き合っている人たちがいることを実感した。

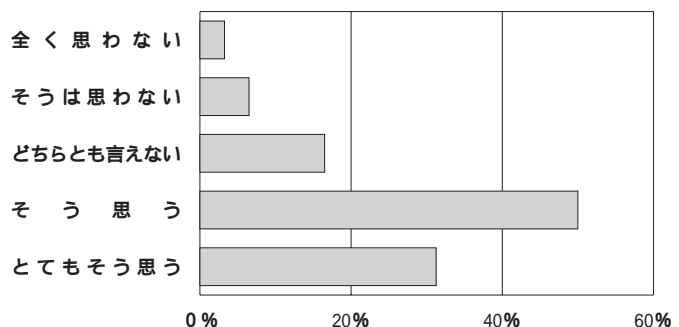
以上のような学生の記述からも、基礎体験学修が教師を目指す学生にとって、有意義な体験になっていることは明白である。

学生に「1,000時間体験が教師をめざす学生にとって有意義だと思うか」というアンケートについては、「全くそう思う」「そう思う」と答えた学生は、81.4%であった。

残り約20%の学生は、1,000時間というの多すぎて負担であるとか、時間がないといった声が多く、前述した時間の積み上げが50時間に満たない約2割の学生と重複している。

【1,000時間体験が有意義だと思うかについて】

N=167



(3) 問題点

事業参加にあたっての移動（交通手段）について

事業への参加については、学生は交通手段として自転車と公共交通機関しかない。また、県内外を問わず事業実施会場については、全く初めてで無知の者が多く、どこにあるかわからない、どうやって行けばよいのかわからないといったことで困った学生がかなりいた。バスの便が十分でない所も多く朝9時からの活動に間に合うためにアパートを6時半とか7時に出なければならぬ状況もあり、学生を悩ませたものも数件あった。JRの駅で電車を降りてさらに徒歩40分という学校へ参加する学生もあり、この件については次年度以降の開始時刻等について、配慮をお願いしたところである。

また、事業実施者に対しては、学生の活動に対する対価は学生も学修のためであることから、当然求めるものではないが、交通費については遠隔地についてはできればお願いしたい旨、伝えてきた。それでも予算の厳しい民間団体などは支給できない状況もあり、それは情報として学生に伝えて募集してきた。

今後、事業実施者から依頼票を提出してもらおう折りに、アクセスや所要時間等についての情報も得て学生に提供する、いつでも地図や時刻表などいつでも情報提供できるように体制をとるなど、検討する必要がある。

大学の授業との関わりについて

今年度スタートした体験学修は、その対象が1年生であることから、授業日の体験学修への参加は、ほぼ不可能な状況であった。おのずと参加機会は週末や休業中に限られた。しかし、授業日にも学童保育などのニーズはあるため、体験の場の開拓しても相互の時間的な調整がつかないことで諦めざるを得ないこともあった。特に、学校が夏季休業日に入りがけに実施が集中したキャンプなどの事業は、大学ではその頃試験前や試験中ということで、断る事業が数件出てきた。こうしたことから、先方には前もって大学の年間スケジュールをお渡しして、日程調整できるものはして頂いて学生を受け入れて頂くよう協力をお願いした。

その他

学生からは、その他に「課題が多いので短期間でできる活動を増やして欲しい」という声もあった。当初、活動の場の開拓に県教育委員会、市町村教育委員会、公民館長会などを歩いて回ったが、1年生だけが主たる対象であることから参加する学生が一人もいないという状況も多々あった。そのため、事業者にしりぞくことなくさらなる開拓を見合わせた。学生にとってはメニュー不足もあったということである。年度が進めば対象学生も増加するため、体験の場の開拓は必要不可欠と考えている。

4 基礎体験の成果

一つ一つの体験が学生にとってどんな効果をもたらすかということまでの分析をどのように行うかということはまだ、見えていない。90を超える事業の実施主体者に学生の視点で事業を企画し、きめ細かな指導をお願いすることは困難であり、学内での学生指導が重要であると思っている。例えば、学童保育を運営している保護者の方々に期待するのは、子ども達と触れ合う場を提供して下さることと学童保育の運営上起こる様々な作業や課題について、その後ろ姿を通じて教えて頂くことである。

事業者である連携先の方々から成果や課題について聞かせてもらう場を今回設けることができなかったが、相互が経験を積みながら情報交換を重ねる中で、学生への期待を共有したり、学生への指導のあり方について協議していきたいと考える。

多くの学生は、年度当初のオリエンテーションから基礎体験学修への足取りは重かったに違いない。まさに「やらされる」体験だからである。しかし、多様な活動にそれぞれが参加し、子ども達と遊びや学習、野外体験プログラム等を通じて触れあうことを通じて、子ども達ともっと関わりたい、役に立ちたいと思うようになり、積極的に自ら参加しようとする姿に変わっていった。

また、役に立つためにはどうすればよいのかという課題が見えたとき、教員や地域のボランティア、指導員等の大人の専門的なノウハウを学ぼうと後姿を追うようになっていくのである。実際そんな気持ちで指導者を観察している学生も出てきた。

このような現場での体験がより教職への目標を明確にさせたり、それと照らし合わせて自分を見つめるようになるのではないか。さらに、基礎体験での体験で芽生えた教育の重要さや指導法などに関する課題が、学内における講義や実習によってより明瞭になったり、解決されたりしてその有用性を高める結果となると期待したい。

大学の地域貢献が大きな課題となっている中で、学生たちは、市町村教育委員会、公民館、学校、学童保育、NPO、民間育成団体・・・と数多くの教育実践現場に出かけていき、学生自身が大きな成長を遂げ、また事業実施主体者からも学生の参加により成果が上がり、期待以上の学生の活躍に大いに感謝された。今後、さらに学生の教職へ向けた体験として積極的に学生への指導についても関わってくださるようセンター教員も現場に出かけて行って、共に活動を見ながら情報交換を行い、良い関係を構築していきたいと考えている。

資料1 基礎体験活動記録票

基礎体験活動記録票 (様式2)

(自然環境) 学生番号 [REDACTED]

活動名	松江養護学校 学童クラブ	分類	- - -
活動期間 および 活動時間	期間 平成16年8月3日(火) ~ 平成16年8月12日(水)		
	今月の活動時間 (18) 時間	累計	(18) 時間
これまでの活動時間 (0) 時間			
活動場所および 所在地	会場名 松江養護学校		
	所在地 島根県松江市		
担当した活動内容やその概要			
<p>学童クラブに来ている子ども達と交流した。ご飯を食べ、一緒に遊んだ。1人の子どもに2人づつついて、遊びの手助けをした。宿題をやらせた。遊びの中でエグザイル遊んだ。パズル、本を読んだ、しゅら節、ピース、フックを遊ぶ遊ぶなど楽しませた。</p>			
得られた成果や感想・今後の課題等 (活動に参加して感じたことを記入して下さい)			
<p>初めての学童クラブで、子ども達と遊ぶのが初めて。あれが楽しかった。2回目は、少し変わった。子ども達と遊ぶのが、どうも楽しかった。子ども達と遊ぶのが、どうも楽しかった。子ども達と遊ぶのが、どうも楽しかった。子ども達と遊ぶのが、どうも楽しかった。</p>			
事業実施者のコメント			
<p>初めての体験、とまどいもたくさんあったと思うが、一生懸命取り組んでおりました。</p>			
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; display: inline-block;"> 時間認定 </div>			
平成 年 月 日 事業実施者の確認 (サイン) [REDACTED]			

*活動ごとに記入してセンターへ提出して下さい。